

モノの収集と製造：地方における近代化について

Michel, Wolfgang

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University : Professor : History of Euro-Japanese Cultural Exchange

<https://hdl.handle.net/2324/2895>

出版情報：信州モノづくり博覧会：モノづくりの東西交流，pp. 55-63，2006-01．長野市立博物館
バージョン：
権利関係：



第50回特別展

信州モノづくり

—モノづくりの東西交流—

博覧会



目次

はじめに

凡例

I モノづくり各論

- 1 信濃のモノづくり環境
- 2 戦乱の技術革新 - 鉄砲と医療-
- 3 医学 - 丸山丹治の往診箱-
- 4 薬学 - 信濃の薬、薬草-
- 5 和算 - 寺島宗伴と和算-
- 6 測量 - 伊能忠敬と信濃の測量術-
- 7 天文 - 信濃の天文学-
- 8 和時計 - 渡辺虎松と信濃の和時計-
- 9 写真 - 信濃写真ことはじめ-
- 10 本草学 - 信濃の本草学、博物学-
- 11 写生 - 思田緑菴と川上冬庵-
- 12 好古趣味 - 川崎將軍塚古墳の鏡-
- 13 養蚕 - 養蚕とモノづくり-
- 14 出版 - 井出道貞と『信濃奇勝録』-
- 15 語学 - 佐久間象山のハルマ出版計画-
- 16 近世から近代へ - 田中芳男と博覧会-

II 論考

1. 「モノの収集と製造-地方における近代化について-」

ヴォルフガング・ミヒェル

2. 「江戸・明治期の信州における医療器械について」

ヴォルフガング・ミヒェル

3. 「信州における和算の広まりと特徴」

小林 博隆

4. 「近世信濃の本草学・博物学年表」

青木 歳幸

III 資料解説

IV 特別展関連行事

1. 江戸のモノづくり第7回国際シンポジウム
2. 江戸のモノづくり探訪①～⑥

参考文献

協力者一覧

凡例

1. 本書は平成17年10月1日から11月23日までを会期とする第50回特別展「信州モノづくり博覧会」の解説図録である。
2. 図版は展示資料の一部であり、図録掲載と展示の順序は一致しない。
3. 展示資料は会期中に一部展示替えを行う。
4. 指定文化財は重要文化財は○、県指定文化財は◆、市町村指定文化財は△で示した。
5. 図録には次の方から王冠を賜った。
 - ・ヴォルフガング・ミヒェル氏 (九州大学大学院教授)
 - ・小林博隆氏 (長野県立松代高等学校教諭)
 - ・青木歳幸氏 (長野県立上田高等学校教諭)また、展示企画、資料調査、写真撮影などについて、多くの機関並びに個人の援助を賜った。巻末に記し、感謝の意を表する。
6. 本文中の敬称は略させていただきます。
7. 本書に掲載した写真は長野市立博物館職員が撮影した。また、下記の機関から写真の提供をうけた。
 - ・飯田市美術博物館
 - ・伊能忠敬記念館
 - ・慶応義塾図書館
 - ・国土地理院
 - ・国立公文書館
 - ・市立長浜城歴史博物館
 - ・東京国立博物館
 - ・東京都立中央図書館
 - ・名古屋市博物館
8. 本展覧会及び解説図録は降幡浩樹が担当し、館員がこれを補佐した。また、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」ならびに同「信州プロジェクト実行委員会」の協力を賜った。
9. 表紙の写真は樽時計(古川寺)、小方儀(小林太郎)、奇應丸茶袋(高瀬資料館)、養蚕乾湿計(清水恵之助)、茶運び人形(個人)。裏表紙写真は渾天儀(田中本家博物館)。

II 論 考

モノの収集と製造 一地方における近代化について

ヴォルフガング・ミヒェル（九州大学大学院教授）

(1) 地方という概念の諸相

地方という言葉は「一定の所・地域」という意味合いでの使い方が11世紀から確認できるが、江戸時代に入ると、「町方」に対する言葉としてジカクと呼ばれる「地方」は、農村や田舎を意味したり土地制度や民政一般を指した。また、明治期以降、ヨーロッパを手本にした行政制度や中央集権的国家整備の下で必須の言葉となり、「地方自治」やその他多くの複合語が生み出され、日常語としても急速に普及した。

そもそも「或る一定の所・地域」という絶対的な意味合いであった「地方」という言葉は、現在では相対化してしまい「中央」や「都市部」に対する「地方」となった。中心と周辺、あるいは中核と辺境は、それに類似する概念群であると思われる。これは空間上の関係を表すだけではなく、権力などとの距離関係を表す概念でもある。多くの人々は、中央や都市部には一定の優位性・重要性・決定力・強さや進歩をあてはめ、地方という言葉に劣等性・下位性・弱さや遅れを結びつけがちである。また、都市は権力に近く、地方は権力から離れているという感覚を有する人々も多いようである。さらに外界との関係に目を向けると、地方は人々の内向性という連想を呼び起こし、都市部の人間の方がより外向的であるという強いイメージを引き起こしがちなのではないと思われる。

1世紀以上続いているこのような解釈は、次第に先入観として定着してしまい、都市部および地方の人々の自己像と他者像に組み込まれてしまった。既成のものとして世代を越えて伝わるこの概念は、果たして歴史の実情と一致しているのかどうかという問題があるだけでなく、このような心的構造は国内の交流、ならびに今後の国の発展の障害になりかねない。いうまでもなく、日本の近代化の担い手は都市部の人間のみだったわけではなく、地方を抜きにして様々な動きを充分に説明できないこともある。地方・都市部を問わず近世・近代の歴史を再確認した上で、これからの日本像を検討していかなければならない。

(2) 近代化の特異性と普遍性

筆者の祖国ドイツも、明治期の日本で大いに手本とされたが、イギリスと比較するとドイツの工業化は大きく遅れを取っていた。国および市場の政治的・経済的統一は、遅々として進まず、プロシアに見られる工業化が本格化したのは19世紀半ば頃である。とりわけプロシアに所属していたドイツ西部のルール地方は鉱山と炭坑から豊富な資源が産出し、工業化に果たした役割は大きかった。国全体が1871年に第二帝国として統一され、各種貿易障害の撤廃やインフラの整備が行われ、イギリスに狙いを定め「追いつけ追い越せ」の方針を打ち出した。日本とドイツの工業化の時代的なズレは意外に小さいもので、明治期の日本に見られる動向の多くはドイツ帝国にも確認できる。また、両国において権力がそのプロセスを促進・管理したことも非常に似通っている点である。当時の日独関係の親密さは、両民族の類似性を根拠に説明されることもあるが、政治体制や資源の乏しさなどから生まれる選択の幅の狭さが、そのような類似性を生み出したのではないかと考えられる。

(3) 日本の街道の魅力

ドイツには日本的な意味合いでの「地方」は存在しないが、山の奥地を指す *Hinterland* という言葉や、その住民を指す言葉として *Hinterwäldler* という呼び方は存在する。そのまま直訳してみると、

「奥地」や「森のむこうの人々」となる。これは都会を基準にした概念ではなく、アクセスの不便および交流の乏しさを孤立化を表す用語である。ドイツ人が信州の地勢図を見ると、おそらく最初にこのような概念が浮かび上がってくるかも知れない。なぜならば、数々の小さな領土に分割されていたドイツでは、19世紀まで国内の交通網があまり整備されておらず、特に中部山脈地帯やアルプスのあたりでは、外界との接触は困難を極めたからである。

しかしながら、地勢図に江戸時代の交通網を追加すると様相が一変する。いわゆる五街道および脇街道が江戸と地方を結んでおり、殿様の参勤交代、伊勢参拝などの行事や飛脚の存在もあり、駅伝制のシステムが充実していた。関所での厳しい検査はあったものの、モノの流通と人間の交流はドイツより遙かに容易であった。

ドイツの場合は道中の治安がきわめて悪かった。宿泊先の宿で客を襲ったのはノミとダニだけではなく、強盗・盗難などは慢性的な現象であった。グリム童話の「ブレーメンの音楽隊」の主人公達の動物が、ブレーメンに向かう途中泊まろうとした宿で泥棒に遭遇したのは、典型的な1事例だといっても過言ではないだろう。

中世の強盗騎士は歴史の舞台から姿を消したものの、近世ドイツの当局は旅行者の財布を軽くしようと様々な手を打った。それぞれの領土の検問所で通過料や税金を科したり、その納付を拒否した人々を人質にし身代金を要求する場合さえあった。各領土の税金を廃止し、国内を税関上統一したのはようやく1834年になってからのことである。その時に初めて全国で利用できる共通の通貨も導入された。重要なのは発達した交通網の存在だけではなく、その利用の便も大変重要なポイントであり、海や河川の運搬を含めると、江戸時代の日本列島内のインフラは決して悪くはなかったと断言できる。

さて、本曾路は中山道の本曾谷を通る部分をいう。江戸日本橋より発し、信濃・美濃・近江を経由し、京都三条大橋に至る中山道は、当時の交通網の最も重要な街道の1つであり、元禄頃来日したドイツ人ケンペルによりヨーロッパにも紹介された。その後も本曾路は19世紀の浮世絵版画「本曾街道六十九次」として西洋にも伝わった。

このような街道は、国中の人々が情報とモノを共有する上で極めて重要な役割を果たした。宿駅の住民は動かなくても日常的に異邦人との接触があり、また、京都や江戸のモノが短期間で本曾谷に伝播することも容易に想像できる。大阪経由で長崎からのアジアの品々、オランダ東インド会社が提供した舶来品も伝わり、いわゆる長崎遊学から帰郷する蘭学者の姿も時折見られたはずである。このような異質性を有するものとの出会いは、双方にとって大変強い刺激となる。ヨソモノに対する警戒心と同時に新しいモノを求める好奇心が育まれ、地元の人々の精神的弾力化を促したに違いない。対外的な越境ではなかったものの、異邦人との日常的な接触により地域内での「越境」が盛んに行われ、人々の視野を広げることに大いに役立っていたと思われる。

このようにドイツアルプスの谷間の住民と本曾谷の住民をめぐる状況は根本的に異なっていた。新しい情報やモノの量は長崎や江戸などより多少少なかったかもしれないが、ドイツの奥地のような孤立状態とはほど遠いものであった。当時の大都市の住民と比較してみても、いわゆる地方の住民の人々のモノと情報へのアクセス状況は決して悪くはなかったといえるだろう。このような目で見てみると、現在で言う「地方」という意味合いのものは、江戸時代には存在しなかったかもしれないのである。

(4) 好奇心と学習

戦争や伝染病のない時代には、村に近づくヨソモノに対し子供から老人まで年齢を問わず強い興味を示したであろう。なぜなら好奇心は人間の最も普遍的な特徴の1つだからである。この点においてドイツと日本に違いはなかったと思われるが、江戸時代の地方における教育水準を加味して考えると、

識字率が高く情報の行き来も盛んである日本の場合、ただの新しいモノを求める欲望にとどまらず、それを越えるような知的好奇心に発展したであろうことが容易に想像できる。旅行者の土産品の一部からも、当時の知的水準の高さを窺わせることがしばしばある。高さ7センチしかない小型の顕微鏡は当時微塵鏡とも呼ばれた。「微塵」とはもともと法華経などに見られる仏教語で、「目に見える最小のもの。非常に微細な物質」の意味である。宮川家の微塵鏡を容れた箱の蓋の裏側に記された次の小文から、これは京都への旅の上土産品だったことが推察される。「此顕微鏡何方御参候とも見終り候ハ、早速持主へ御返し可被候」



「微塵鏡」 木箱村宮川史料館蔵

ここで2つの特徴が確認できる。1つは、少なくとも珍品の一部は村全体を楽しませたということである。顕微鏡が人々の手から手へと回る間に様々なモノが観察され、その経験を語り合う交流も盛んだったに違いない。個々の好奇心は一個人だけのものではなく、共同体全体を刺激するものであった。もう1つの特徴は、そのものの選択にある。顕微鏡は食物のような短期的な快楽をもたらすものではなく、生活および仕事に必要な品でもない。顕微鏡は人間の視覚を拡張するだけの、そもそも役に立たない装置である。肉眼で見えない世界に対する興味には、一定の知的好奇心が窺える。同じ宮川家に保管されている望遠鏡に関しても同様のことがいえるだろう。農業や商業だけに満足せず自分の世界を拡張しようとしていた当時の人々の意欲が感じられる。

日本人の知的な遊び心は、からくり人形・蒸気灯・覗き眼鏡・各種見世物などからも窺い知ることができるが、残念ながら八代將軍吉宗は享保の改革の一環として「新規御法度」という御触を発し、菓子、おもちゃ、着物などの新しい工夫を禁止した。資源が少なく対外依存度の高い日本の場合、華美に流れる風潮を抑えることは避けられない事象であったかもしれないが、このことが日本の技術発展に全く影響を及ぼさなかったとは言いがたいと言わざるを得ない。

幸いに江戸時代も半ばを過ぎると、幕府から統治を任されていた各藩は競って産業を奨励するようになる。しかしその新技術の大半は軽工業レベルにとどまった。結果的に日本の技術発展は多少遅れを取ったかもしれないが、知的好奇心は地方にまで浸透し、多くの日本人が共有するものであった。これは幕末明治期に短期間で日本の近代化を可能にした基盤になり得たと考えられる。

⑤ モノの収集と披露

生活必需品にとどまらず、興味を抱いたものを集める人間は有史以前の時代から存在していたであろうが、近世のコレクションは制御しがたい本能や欲望の産物というより、人間による社会や外界との関わり合いの一定の形態を示す歴史的现象である。本稿は西洋のコレクションの歴史的背景をふまえながら、江戸後期に蓄積された信州飯田の市岡家コレクションの特徴と位置づけを検討することにする。

近世ヨーロッパのコレクションの前身を追求すると、中世の教会が蓄積していた各種遺品、聖遺物等に辿り着く。日本の宝物殿の神宝、刀剣、法具等は西洋の場合と同様に見る人の視線を古代に誘い、霊的・神秘的な力を発揮する。ルネサンス及び大航海時代には、西洋の個人コレクションの歴史が始まる。当初は一般的で代表的なものよりも無比なものが求められた。「驚異の部屋」あるいは「珍品陳

列室」の収蔵品は古美術品、各種の細工等のような人の手で作られた品々と共に、動植物、岩石鉱物標本のような自然物に至るまでの広がりを見せた。自分のコレクションを研究目的に利用する薬剤師、医師、学者にとっては収蔵品の特質よりも類型性こそが重要だった。大自然を縮小した形で自分の管理の下に置いたコレクションでは同定、分類の近代的研究方法が発達した。

日本においても海外からの珍品がものごたを促進した。室町時代には中国の漆器、磁器、漢籍、書画などを飾るための違い棚、書院及び押板が座敷の周りに造られるようになった。市商人および紅毛人の到来により舶来品の種類はさらに豊富になり、貿易の世界的規模化は日本の富裕な人々の生活環境を大きく変えた。勿論資源に乏しい日本では物品の実用性も常に重視された。ヨーロッパの収集家や学者はほとんどこのような政策と関わらなかったが、江戸時代の代表的な博物学者は、何らかの形で幕府の意に沿い国内の産物を追究していた。

江戸後期に代官所の役人を務めた市岡の5代家督智寛および7代の純智により蒐集、拡充された品々は17・18世紀の欧州中産階級のコレクション

に類似していることが分かる。父智寛は千村陣屋の重役を務めながら兵学、漢学、本草学、医学、天文、地理、考古学、和歌、絵画、茶道、華道に力を注いだ。その才能を発揮した業績として特に『伊奈郡商部』が注目に値する。父と同様に好奇心旺盛で絵画の素養を持つ息子純智はとりわけ本草学に詳しく、信州の山野水辺を歩き回り先学者の説を交えながら988種の植物を色彩図譜『本草図彙』に収録した。現存のコレクションは木箱に収納されている化石、岩石、貝類のような品々、また道具や書籍、掛軸及び写本を含めた幅広いものである。文書資料の一部は器物資料と密接に関連している。市岡家の自然標本のはほとんどは「鉱物標本」、「貝類標本」等5つの木箱に収納されている。上記の収蔵品は人工のものから岩石、貝類などの自然標本まで多岐にわたっている。

西洋においても東洋においてもコレクションは社会的側面を持つ。近世ヨーロッパの陳列室に入ると、標本の大半は整理箱等にしまひ込まれ、見物客の顔から隠されていた。市岡家の重箱の蓋を開けると当時の歓声まで聞こえてきそうである。一気に箱全体を見るより、一部ずつじっくり味わうことが重要だったに違いない。

役所勤務や商売や文化的活動により市岡家は幅広い交流を楽しんでいた。芳名録の「短冊類」、「名残草」および「響店家集記」に見られる和算家、絵師、薬学者、棋士、本草家の署名は多彩な人脈と手厚いもてなしを物語っている。来客の多くは収蔵品を鑑賞することができたと思われる。その披露により、客と交わす話題が生まれただけでなく、市岡父子は相手の知識、注目度、社会的評価、社会的地位の向上と再確認を得た。また、見る人も知識を深め市岡家との関係をより密接にすることが多かったであろう。このコレクションは純粋に学問的な目的のために蓄積されたものとは言いがたく、近世ヨーロッパと同様に収集家の趣味及び社会的交流との関連性が高いものだった。また、日本には専用の陳列室はなかったので、収蔵箱は客の接待が行われる部屋に近い、取り出しやすい場所に収納されていたと考えられる。茶道に力を注いでいた市岡屋敷の場合は茶室の隅だった可能性が高い。



「鉱物標本」
市岡智寛収集
飯田市立中央図書館蔵



江戸時代の収集家達は、ヨーロッパ人と同様に知的好奇心に喚起され、自然や人間界のモノを選択・観察し、場合により分析に基づき分類を試み、それは近代科学への地ならしとなった。さらにこれらの収集品は、人間交流の手段としても重要な役割を果たし、容易に広範囲に移動できない人達にとって、故郷以外の世界を把握する手段でもあった。

個人コレクションから公の博物館へのステップは小さい。すでに1683年には、珍品収集家アッシュモール(Elias Ashmole)及びトラデスカント(John Tradescant)父子のコレクションを中心に、オックスフォード大学に西洋史上初の博物館が開館した。この頃から教育や研究、また娯楽のために、人類および自然界の資料を蓄積、保存、展示する施設に対し、ミュージアム(museum)という用語が用いられるようになった。18世紀後半、とりわけフランス革命以降、ヨーロッパの各地域で博物館、工芸博物館、美術館の設立が相次いだ。1851年から開催された万国博覧会及び1859年にチャールズ・ダーウィンが発表した進化論は、博物館のさらなる発展を大いに促進した。

18世紀の西洋の博覧会は日本にも大きな影響を与えた。江戸時代、各地からいろいろなものを集めて展示する薬品会や物産展のような催しが、18世紀半ば頃から江戸や大阪で博物学者達によって行われていたが、本格的な産業博覧会が開かれたのは、明治10(1877)年、欧米の万国博覧会をモデルに東京上野で開催された内国勸業博覧会が最初であった。その嚮導をとったのは当時の内務卿大久保利通であったが、飯田出身の田中芳男(1838~1916)の貢献もまた、近代日本の博物館の歴史に残るものであった。

しかし、明治4年から9年の間にすでに都都市のみならず、日本の地方にも地元の人々が担う博覧会が行われていた。この6年間に開催された43回の博覧会のうち、計8回が信州地方で開催された。具体例をあげれば、まず飯田博覧会(明治7)、次に松本博覧会(明治7)、高島博覧会(明治7)、高遠博覧会(明治7)、木曾福島博覧会(明治7)、長野博覧会(明治8)、飯田博覧会(明治8)、最後に長野博覧会(明治9)となる。8回も博覧会が開催されたことは、この地域の積極性を物語っているといえるだろう。また、明治10年以降に開催された内国勸業博覧会における長野県からの出品も印象的である。長野県の生糸産業・漆器製品・木引産業などが著しく台頭し、現代的産業基盤への長野県の勢いを物語っている。

上述の木曾福島博覧会の出品目録に目を通すと、江戸時代の薬品会を思わせるモノや、古美術品などの珍品が目につくが、なにより出品者の数が非常に多いことが特徴的である。おそらくこの地域全体の人々が、各自それぞれの家宝2・3点を提供したような様子だったのではないかと推察できる。



松本博覧会出品一覧『松本雑誌』より
上田市佐藤邦子蔵

⑥ モノづくりの東西

『旧約聖書』の「創世記」に神様が、アダムとイブを楽園から追放する際、今後汗を流しながら畑を耕さなければならないという罰を与えた。そのためか「真い汗をかいた」というヨーロッパ人は今でもいないが、自分の仕事を誇りに思う職人達は、特にドイツでは変わらず数多くいる。

中世の都市では同業者組合(ギルド)が誕生し、見習いという制度によりそれぞれの分野の技術を次世代へ伝達していった。また、職人としての検定試験に合格した15、16歳の若者に、修行の旅を義務づける組合がほとんどで、これは大学生と同様にモノ作りに携わる青年達が1、2年にわたり、ドイ

名声が広まりヨーロッパの上流階級の間にブームをもたらした。

有田の特右衛門などの職人達は、中国の製品の模倣だけではなく、さらなる技術および染付の新しい美的表現を開発し、18世紀に登場する磁器職人に大きな影響を及ぼした。

幕末明治初期の生糸の生産も東西技術交流の良い事例である。今日ではほとんど認識されていないが、17・18世紀の日本は中国産の生糸の輸入に大いに依存していた。幕府は、輸入の大半を独占していたポルトガル人の追放を検討し、1639年7月老中および大目付が、数回にわたりオランダ東インド会社の商館長カロンと相談した。

「高この閣老は、プレゼンントに尋ねた。「もし日本の当局が、この国からポルトガル人を追放したら、これまでポルトガル人がしていた様に、貴下達は日本に薬、絹織物を持って来る方法を見出すことが出来るか。」我々は、出来る、とはっきり答え、次の理由をあげて説明した。」(オランダ商館日記、1639年7月20日)

さて、その22年後の寛文元年(1661)に塩尻村で養蚕製造が始まった。元禄4年(1691)には上田藩も養蚕製造を奨励するなど国内の生産量が徐々に増大してはいたが、海外からの輸入に相変わらず依存していた。

ヨーロッパ、とりわけフランス・イタリア・ギリシャなどでは、以前から生糸生産が盛んであったが1840年の微粒子病の発生により養蚕業は大きな打撃を受けた。例えば世界一を誇っていたフランスの繭生産高は6分の1に激減し、そのためヨーロッパの業者は日本から養蚕の輸入を開始した。幕末明治期は、ヨーロッパからの技術移転が東西交流の中の最も大きなメルクマールとされているが、日本からの恩返しは、ヨーロッパにおけるジャポニズム、つまり日本趣味を引き起こした浮世絵・版画・陶器・磁器・鉛・各種手工芸品だけにとどまらない。筆者は目下、1873年にパリで開催された第1回東洋学会議に関する小論文を準備しているが、その際日本の科学技術に寄せられたヨーロッパ人の関心の高さに驚いた。9月3日の第7部会のテーマは日本人のサイエンスであり、1週間にわたり文学・人類学について議論を交わした出席者は、今村和郎という岩倉使節団と共に来仏し、パリの東洋語学校の講師を務めていた日本人のあらゆる助言を受けながら、和算、医学、農業における肥料、接ぎ木の技術、藍染、日本の鉱物学や本草学および蚕と生糸の生産について、意見の交換を行った。後ほど印刷された議事録の中で、特に蚕に関する記述は最も多くの紙幅がさかされている。ここで興味深いことに信州の名前も登場している。ここの養蚕が最も良質だという評価であった。しかし、房州等その他の産地からも輸出されていたので、ヨーロッパ人は信州のものに及ばないようなものを、やむをえず購入せざるを得なくなる。日本での購入、製品の検査方法、運搬などの経費などについて意見を交換したのち、最終的に出席者から「ヨーロッパが日本市場へのアクセスを求めるならば、日本によるヨーロッパ市場へのアクセスをも認めるべきだ」という意見が提出された。その16年後、国内最初の養蚕学校である小泉郡立養蚕学校の初代校長を務めた三吉本繁はイタリアとフランスへ渡り、ヨーロッパの養蚕調査を行った。

信州からの輸出養蚕は全国の4割から5割を占めたが、その中心をなしたのは上田小泉の小さな養蚕



「外国製顕微鏡」
上田市佐藤思左右藏

であった。

明治17年(1884)には日本国内でも微生物の胞子が発見された。このことはヨーロッパから輸入された菌叢説が、医学以外の分野でも普及する契機となった。このように生産生産という分野においては、バランスのとれた技術交流の良い事例を見ることができる。

(7) 日本における地方の貢献

この養蚕業の事例は、地域性と国際性を結びつけるものでもあり、地方の行動範囲は必然的に限定されるという先入観を打破するものでもある。或る分野に集中的に力を注ぐと、今日でも国際的に成功する可能性は充分にある。ドイツおよび日本の多くの中小企業はそれを今日まで証明している。

また、地方が産出しているのは製品だけではない。文化的アイデンティティを保ちやすい環境として、江戸時代から地方は先駆的な役割を果たす人材を出しており、それは決して稀なことではなかった。例えば大分県の中津は、農学上の様々な成果をあげたが、明治期に入ってから福沢諭吉のみならず九州の行政および産業界で多大な業績をあげた人材を輩出した。中津出身者以外でも、野呂元丈、三浦梅園、平賀源内、帆足万里、佐久間象山、田中芳夫などの日本の発展・近代化に貢献した人々の多くは地方出身であった。これは偶然ではないと思われる。安定した環境で育ち、自然とふれあひながら知識欲を養う若者が、或る時点で越境し異質性の豊かな都市部に入り込めば、その蓄積されたエネルギーが、卓越した発想や行動を引き起こすことは想像に難くない。

地球規模でその重要性を増す環境保護、資源の節約、人間の平和的共存のような課題になると、自然を日常の体験からではなく、学校の教科書やメディアの報道から学んだ都市部の若者が、どれほどの対策を生み出せるかは甚だ疑問である。東京や大阪のようなとても放郷と呼びにくい巨大な集合体の中では、日々人々は振り回されかねない。もちろん都会の若者だからといって、21世紀の日本人の再定義への貢献を行うことが全く不可能だと断言することはできないが、一定の距離を保ち、両足が地についた立場から時代の情報とモノを分別しながら、祖先の精神において大胆に提言する勇敢な地方の若者が輩出する可能性こそ決して小さくないと確信している。近世・近代の歴史に目を向けると、都市部と地方の人々の葛藤と対話は、日本の安定化と発展に今日こそ不可欠であるとあらゆる分野で確認できる。このすばらしい伝統は今後とも継承しなければならない。

※本稿は、2005年8月27日、木祖村村民センターにおいて行われた「江戸のモノづくり国際シンポジウム in 木祖村」での同名の講演内容を原稿化したものである。